

信 毎 歌 壇

小島 なお 選

わが耳に孫の鼻息こそばゆくスポンジボブは海綿だよ
(埼玉県鶴ヶ島市) 由井 意男
ラベンダー蜜蜂と共に摘み取りぬ警戒色と夏のワンピース
(松本市) 西野 千古
紫陽花を見に来たはずが気がつけばカタツムリだけ百枚撮ってる
(塩尻市) 島津 文雄
朝粥の土鍋のふたを持ち上げて湯気の向こうに普段は見えない
(信濃町) 吉沢 英夫
品出しに意地でも着かぬ膝小僧 痺れるほどにきみはカッコイイ
(松本市) たいらもち
展着剤、殺虫剤に殺菌剤 天中殺を覚えて久し
(飯田市) 萩原 英文
娘家族ともう来ることはないのだから三年前と変わらぬイオン
(千曲市) 関 津和子
「竹内」の名字の教師四人おり名前呼び捨て「そろそろ来たぞ」
(上田市) 竹内 創造
この度の再々々発防止策こんどそはと意気込む社長
(駒ヶ根市) 小平ひさし
明日からは値上げの予想のゴミ袋空蟬のこと種だけ並ぶ
(長野市) せきたつお

佳作
肉じゃがに酒も味噌も入れるわけをAETに訊かれとまじふ
(飯山市) 市村紀久子
辞書たちが棚の上から見つめてるスマホでググるうちの家族を
(伊那市) 赤羽 正彦

第一首、思わぬ秘密を耳元でささやく孫。海綿も孫の鼻息もふわふわと不思議な気配を漂わせて。第二首、蜜蜂は体色を、私はワンピースを纏って自分を守っているのかも。あざやかな色彩の初夏。第三首、100枚！作者にとっては紫陽花よりもカタツムリのほうがずっと興味深いのだろう。第四首、どこか浦島太郎の玉手箱を思わせる場面。湯気の向こうにいつも通りの景色が見えてほっとする。

米川 千嘉子 選

蟻の列突つ切つてゆく縞蛇が尾を巻くる日の盛りなり
(小諸市) 加藤 陽介
寝たきりで十七年を生きた妻の額は冷たく光る
(御代田町) 柳沢 光雄
雨が降り始める音の聞こえてきたが寝てから私は泣きます
(松本市) 堀内 悠子
八十九歳のしわある腹に皮下注射八十七歳のわが手ふるへる
(長野市) 水木 朱実
普段とは不断の努力サービスを止めればあなたの知らないわたし
(松本市) 美甘 歆
目の前にあるのに買えず現金不可師への土産駅の売店
(長野市) 矢島あさ子
稲荷山温泉跡地にアオキ建ち幼き思い出ころにしまふ
(千曲市) 関 津和子
これからは面会謝絶何も今トランプさんの噂しなめても
(佐久市) 武藤 尚子
月一回実母にハガキ出したとか養母の深愛後で我知る
(長野市) 松本 博人
亡義父が植えたわが替え替えせし二十年山紫陽花が満開の山
(小諸市) 尾沼美枝子

佳作
染めるたび舌が手を褒めて笑みし母栗色トーン一箱残りつ
(東御市) 渡辺美保子
公園で牛串香るキッチンカー素通りして「1000円」が見え
(伊那市) 赤羽 正彦

第一首、日盛りの自然の一コマ。言葉も引き締まって迫力がある。第二首、17年とは重い歳月だ。下句の沈黙だけがそれを受け止めることができる。第三首、空もこらえきれなくなったように雨を降らせる。その音に隠すように作者も。第四首、こちらも老夫婦の場面。作者も手元が不安になってきたのだろう。高齢の夫婦だけの生活の現実を詠んだ歌に息をのむことが少なくない。

小池 光 選

この夜を早送りして朝になれあなたに会える十時間前
(松本市) 点と弧
形見の指にすべらせながむれば私の手なの母の手があり
(長野市) 小林ちづる
仰き見る樹齢五百の神木はだまつて其処に今日も立ちたる
(箕輪町) 向山 政俊
夕立の去りて濁りし川底にへばりつきたる大山椒魚
(小諸市) 加藤 陽介
どこいしよ長い坂道どこいしよ桑を背負った懐かしき日々
(小川村) 久田 肇
光あふれイエスの塔は戦争の愚かさ照らすサクラダ・ファミリア
(安曇野市) 細川 恒
親燕せつせと餌を運びたり五つの口がいつせいに開く
(小海町) 依田 久代
わが椅子のリクライニング倒したるままに固まりて梅雨に入りたり
(長野市) 原田 浩生
車椅子使えるトイレに改修す一度も使わず夫は逝きたり
(小布施町) 市村志津枝
四時前からもうカッコウが鳴き出したあと平時は眠りたいのに
(長野市) 島田 怜子

佳作
人間はひとを敬う動物でなければならず平和のため
(佐久市) 水間喜美子
歌い切る「信濃の国」を最後まで認知症とふ九十六才
(佐久穂町) 石田 弘子

第一首、信毎歌壇にはめずらしい相聞歌。明日会えるではなくて10時間たったら会える、ということが切迫感があって、泣かせる。第二首、母の形見の指輪。自分でつけてみたら、自分の手が母の手になった。いつの間にか私も年老いたのだ。第三首、何の木か分からないが、樹齢500年の大木がある。嘆かず、騒がず、いつも黙って立っている。大きな木というものは神聖な感じがするもの。